

ブレヒトの『トゥーランドット姫 または 三百代言の学会議』について

友 永 輝比古

要旨 ブレヒトは、ワイマール共和国崩壊の一因は知識人（学者）にある、と見ていた。かれは、インテリを中心としてワイマール共和国時代を整理する意味合いを込めて、『トゥーランドット姫 または 三百代言の学会議』を書いたと言えよう。舞台を古い中国に移し、ワイマール共和国崩壊過程と中国解放運動をダブらせながら、政界、財界、インテリ層を思う存分に風刺している。

ブレヒトの意図は、『ガリレイの生涯』で「理性のあけぼの」を示したのに対して、この作品で「理性のたそがれ」を示すことであった。しかし、終幕で唐突に中国解放が暗示され、作品全体から受ける印象としては、「あけぼの」と「たそがれ」が同時進行しているように思われる。

さて、ここでは政界、財界については触れずに、白鬚ゼンをとおしてブレヒトが考えた学問像というか、学者像、学者の背骨を探ってみたい。また、作品に描かれた学者と庶民の関係から今日のそれについて考え、最後に上演の可能性について言及する。

「トゥーランドット」は『千一夜物語』に登場する姫君で、求婚者たちに難問を投げかけは、解けなかった者たちの首をはねる。王子カラフが最後に問題を解き、姫君を娶る。この話を題材にして、ゴッツィ、シラー、プッチーニ、ブルクグラーフはそれぞれ作品を残しているが、ブレヒトに強い刺激を与えたのは、ブルクグラーフのオペレッタ劇『トゥーランドット姫』（1925年）である、と言われている。

違う時代に生きたこれら作家たちの作品を比較することは、同じ題材を採り上げているだけに、それぞれの間観、世界観の歴史的な違いが分かって、面白い課題であるに違いないと思う。しかし、ここではブレヒトの『トゥーランドット姫 または 三百代言の学会議』（1954年）のみを扱い、ブレヒトが常々問題にしていた学者について触れることにする。

ブレヒトは、ワイマール共和国が崩壊しナチスが台頭した、その原因のひとつは当時のインテリの社会的機能（だらしなさ）である、と見ていた。この作品では、場所をシナに移して、共和国時代の政府及び学者が批判的、風刺的に描かれている。『ガリレイの生涯』で「理性のあけぼの」を、『トゥーランドット姫』で「理性のたそがれ」を表そうとしたらしいが、カイ・ホー（毛沢東であろう）を登場させたことによって（他の人物の台詞で語られるだけで、実際には登場しない）、ゴージェ・ゴーク（ヒトラー）が政権を奪取したのか、カイ・ホーが首都を解放したのか、少しあやふやな、言いかえれば、開かれたままの終幕になっている。

あらすじ

第1景 皇帝の宮殿

古いシナ。国家は失政と汚職で危機に瀕している。皇帝とその弟が専売権を握る木綿が過剰生産になって木綿の値段が下がり、国家収入が減り、皇帝は毎朝2服吸っていた阿片を1服に減らされる。経済不況がこの国を襲っている。総理大臣（学者）は、「私は、この30年間、著名なトゥイ（インテリに対する批判をこめたブレヒトの造語）たちと、シナを救いうる指導的思想について議論をかわしてきた。しかし諸君、そんな思想はもはやないのだ。」と嘆く。かれは国の未来の展望を見い出せないでいる。

第2景 学者（トゥイ）たちがたむろする茶店

学者たち（みんな帽子を被っている）はこの茶店に出入りして、庶民相手に意見を売っている。物価騰貴の理由、奥方にパンこね槽を買わせないための理屈、不倫の弁解等。かれらの間で、シナを良い国にしようとしているカイ・ホーの噂が出る。かれを信じている学者もいる。露骨に国家批判する学者もいる。あるいは、後に体制擁護の学者協会の会長に出世し、同じ体制によって首を切られる学者もいる。いずれにせよ、ここに集まる学者たちは、トゥーランドット姫と共に登場する宮廷学者が言うように、下級の学者で、「自らの思想によって人類を導く偉大な学者」ではない。

トゥーランドット姫は、なぜ自分は純潔なのか、その理由を買おうとする。学者とのやり取りで、姫はインテリに憧れる男好きの官能的な女性であることが分かる。

ギャングのゴーゲー・ゴークが現れ、経営する用心棒会社の金を学者になるための試験検定料に私的に流用した、その言い訳を買い求める。だが、結局のところ買えず仕舞い。

田舎から出てきた白髭の農夫、ゼンが茶店に入ってくる。かれは、学者はその「偉大な思想」によって「国家を導き」、「人類を指導する」ものと、純粹に心から思っている。かれの夢は学問をし、学者の仲間入りをすることである。

芝居の進行の中で、政府が木綿をかくしたことによって木綿不足が生じ、木綿の値が上がったことが告げられる。「原料不足で紡績工場が閉鎖されそうだ」とか、「機織職工の党は政府が木綿のかくし場所を公表しない場合には暴動を起こす構えでいる」との噂が流れる。

第3景

a 皇帝の宮殿

政府が木綿を隠したことによって、木綿の値段が上がり、国庫収入が増える。トゥーランドット姫の下穿きは、今や貴重品となった木綿である。皇帝は朝2服目の阿片を吸っている。

総理大臣が、機織職工党がデモを行っていること、カイ・ホーが反政府ビラをまいていること、機織職工党とはだか党が統一行動を起こしたことを報告する。

対皇帝交渉にやってきた機織職工党の学者とはだか党の学者は、本題を忘れて足の引っ張りあいをする。互いにマルクスを引用して民主主義論、自由と規律に関する議論(?)をやり始め、殴り合いの喧嘩をする。

反政府勢力の弱点を見て取った皇帝は、弟の提案にしたがって、なぜ市場から木綿が消えたかという難問に答えるための学会議を召集する。みごと解答した学者へのインテンシヴ（恩

賞)はトゥーランドット姫である。

b 古い満州風の小さな寺院

継ぎだらけの木綿の外套が天井から吊り下げられている。歴代皇帝が即位のときに身にまとったものである。それを前にして皇帝は、学会で難問に答え学者にこの外套を着せ、トゥーランドット姫を娶らせると誓う。この外套を羽織ることは政権掌握を意味する。

第4景

a 学者(トゥイ)の学校

教室で哲学の基本命題、物が先か意識が先かが議論されている。そこへ白鬚のゼンが入って来て、別の雄弁術の演習授業を参観する。生徒は、土地を分配するカイ・ホーはなぜ間違っているのかを証明しようとする。弁舌中、言っていることが体制にとって都合が悪いと、吊るされたパン籠が上に上がり、都合が良いと籠は下がる。唯一こっけいな場面。

ゴーゲー・ゴークが入学試験を受けに来る。過去2回受け、2回とも「3かける5は？」の質問に25と答えて不合格。今度で3回目。ゴーゲー・ゴークの家庭教師は、ゴークは熱心に勉強し、3かける5は15であることを学んだから、同じ問題を出すようにと頼んで、試験官を買収する。他方、ゴーゲー・ゴークの子分は、親分がいつも25としか答えられないので、質問の方を「5かける5は？」に変えるようにと、試験官をピストルで脅す。試験官の質問は「5かける5は？」。ゴークの答えは「15」。試験官は慌ててその場を逃げ去る。

ゴーゲー・ゴークは、ここにいたら金を取られるだけだと言って、さっさと退場する。白鬚のゼンもここでは何も学べないと悟り、カイ・ホーに興味を持ち始め、学者の学校と決別する。

b 路地

学者たちが白鬚のゼンに意見を売ろうとする。ゼンは、学問を粗末にし、学問で汚い商売をしている学者たちを追い払う。

第5景

a ある偉大な学者(トゥイ)の家

この国の偉大な哲学者ムンカ・ドゥー(テオドール・アドルノとも言われている)は、自分が国家の精神的指導者であると自負し、学会会議の晴れ舞台に立つことを名誉のように思っている。秘書が用意した2つの引用文のひとつを目をつぶって選び取り、秘書に金を払う。ムンカ・ドゥーは画家に自分の肖像画を画かせる。

母親は不安そうに息子のムンカ・ドゥーを見ている。庶民はみんな木綿の隠し場所を知っているから、学会会議で学者の言うことが信用されるかどうか、母はそれが心配なのである。

b 学者協会の宮殿

この場面は、広間のシーンが5回、入口が5回、控え室が2回あり、回り舞台によるスピーディーな場面転換が他の場面以上に要求される。

白鬚のゼンは、会議場の広間で、皇帝家族及び会議出席者に紹介される。かれは学会会議の観察者である。

入口の所で2人の哲学者が演壇に立つ順番を争っている。ゴーゲー・ゴークも「私にもチャンスを与えろ。ここは民衆出の者を排除するのか。」と叫ぶが、追い出されてしまう。

最初に演壇に立った学者は、長々と演説した後に、木綿が隠されていることを知っているにも拘わらず、木綿不作説を主張する。トゥーランドット姫は、かれのような見え透いた嘘を言う学者とは結婚したくないと言い、「かれの首を切りなさい」と刑を言い渡す。かれは、若手の学者が言うように、嘘をつくのは良いとして、嘘のつき方が下手だったのである。

次に登場した学者は学者協会の会長。かれは控え室でトゥーランドット姫に紙の着物を進呈し、姫はそれがすっかり気に入る。広場の貴賓席では、皇帝と弟が、木綿を高値で売るために、生産過剰の綿花の焼却処分について話し合っている。学者協会の会長は、綿花は十分に生産されたが、産地からの輸送途中で消えてなくなってしまったのだ、との説を唱える。演説中にカイ・ホーの抗議のピラがまかれ、広場は騒然とする。学者協会の会長は、最後に、木綿ではなく紙の服を推奨する。なぜ市場に木綿が出回っていないかという難問に対する解答にならない解答に、トゥーランドット姫は怒り、控え室で着ていた紙の服をひきちぎる。学者協会の会長も首切りの刑。

トゥーランドットは、この国の哲学の神様と言われているムンカ・ドゥーに期待を寄せ、色目を使う。政府は学会議の反省から、難問解答に応募する学者の非シナ活動調査を決定する。姫と一晩過ごしたこの大哲学者は、審査する総理大臣の前で完全に体が固まってしまう。演壇に立った哲学者は、出だしは良かったものの、ついに、自分にとって皇帝の倉庫に隠されている木綿が問題なのではなく、人間の「自由」、「美德」が問題なのだ、と言ってしまふ。真実を暴露してしまったこの哲学者も首を切られる。

第6景 市の外壁

外壁には学者たちの首がさらされている。トゥーランドットとゴーゲー・ゴークが出会う。ゴークはどうやら子分に追われているらしい。二人は姫の護衛に守られながら、ロマンチックな雰囲気の中で話はずむ。やがて二人は宮殿に向かう。ゴークにとって権力に近づく近道ができたわけである。

誰もいなくなって、学者の首たちが急に喋り始める。「どんな問題にも必ず解答はある。それを見つけるのに、時間が必要だ」、「今はそれがたっぷりある」と。

第7景

a 皇帝の宮殿

機織党の代表者が総理大臣と話をしている。はだか党の代表者は来ていない。庶民の味方であるはずの二つの党は、もはや統一行動が取れないのである。カイ・ホーが北部から首都に向けて動き出したと、軍事大臣が報告する。皇帝の弟は、クーデターを起こすが、失敗する。トゥーランドットがゴーゲー・ゴークと一緒にやって来る。街では群集が騒いでいる。ゴークは、木綿を問題にすることそれ自体を禁止するようと、皇帝に提案する。皇帝はゴークに問題解決を委ねる。街で騒いでいる群衆はゴークの子分たちで、今にも宮殿に入って来てゴークを捕らえようとしている（内部矛盾）。ゴークは身の危険を感じ、とっさに軍事大臣の綬をむしり取る。かれは皇帝から委譲された権限を行使して、武器庫の武器を子分たちに与える命令を下し、子分の腕に軍事大臣の綬を巻きつける。ゴーゲー・ゴークは強行手段を取り、皇帝の弟、軍事

大臣、機織党の代表者の逮捕を命じる。

b 宮殿の中庭

ゴーゲー・ゴークは武器を持った子分たちに、皇帝の倉庫に山と積まれている木綿の焼き討ちを指示する。「十分に強力で強力な保護なしには、いかなる私有財産も安全ではない」ことを実例（見せしめ）によって、為政者、国民に分からせるためである。

第8景

a 小さな学者市場

ここでは一般教養の学者、経済学の学者、医学の学者、恋愛の学者たちがそれぞれの知識を売っている。突然、皇帝の倉庫が火事になり、学者たちは不安がる。ゴーゲー・ゴークが現れ、火事の犯人は機織職工党とはだか党の学者で、謀反人カイ・ホーへの合図の狼煙だとし、不満分子の掃を宣言して立ち去る。武装した兵たちたちによって、市場の学者たちの一斉点検が始まる。人畜無害の書物まで禁止される。学者たちは帽子を隠す。経済学の学者はゼンにカイ・ホーの本をそと渡す。

b 宮殿の中庭

トゥーランドットの二人の侍女が姫とゴーゲー・ゴークの噂をしている。どうやら姫とゴークの関係はまずくはないらしい。

第9景 洗濯屋「アーモンドの花」の前

鍛冶屋の所にさまざまな学者が文化財を持ち込んでくる。楽譜、女神の像、地球儀、絵画など。やがて学者たちはそれぞれ思う方向へと立ち去っていく。白鬚のゼンはカイ・ホーのいる北部の解放区へ。

第10景 古い満州風の小さな寺院

国内情勢は緊迫している。政権を巡る内部の争いと北からのカイ・ホーの進軍。軍事大臣は、トゥーランドットとゴーゲー・ゴークの結婚式の前にゴーゲー・ゴークを逮捕することを軍に命じる。他方、ゴークは式典後に政府要員の全員逮捕を武装した子分に命じる。

皇帝は結婚式を何とか延期させたがっている。気の多いトゥーランドットは、はやゴーゲー・ゴークから若い騎兵隊士官に鞍替えしている。将校が入ってきて、カイ・ホーは首都近くまで迫っている、と報告する。皇帝は、緊迫した状況においては今すぐ結婚式を行うか延期するかのどちらかにした方が良い、とゴークにお伺いをたてる。もちろんゴークは式典挙行を選ぶ。歴代皇帝が即位式にまとった木綿の外套を着ることは、全権掌握を意味するからである。ところが、外套は衛兵に盗まれてしまって寺院にはない。それでも、ゴークは結婚式を強行する。遠くで太鼓の音がする。処刑されたのは皇帝の弟。群集の聲にまじって、兵士が「おまえたちはみんな同類だ。もうおまえたちはお払い箱だ。」

芝居の終幕は、カイ・ホーがシナを解放したことを暗示している（少しあいまいだが）。

白鬚ゼンを通して見られるブレヒトのあるべき学者像

ブレヒトが描く白鬚のゼンは、働いている間は学問との接点がなく、いつか学者になるといふ永年の夢をかなえるために、百姓仕事の現役を離れ、首都に学問をしにやってくる。かれの学者に対するイメージは、「学者の思想にしたがって国のあらゆることが営まれ、学者は人類の指導者である」というものである。この段階ではイメージはまだ純粹で、かれは、上に立つ人々と他の大勢の人々を区別せず、それらをひっくるめて学者は「人類」の指導者である、と考えている。

しかしブレヒトは、偽者の学者と本物の学者を嗅ぎ分ける感覚の良いというか、感性の鋭い白鬚ゼンを描いている。ゼンは、学者（トゥイ）学校の観念論哲学の授業、雄弁術（詭弁術）の実習授業を参観し、また、ゴーゲー・ゴークの入学試験で試験官が買収に応じる姿、ピストルの脅しに屈する試験官の姿を見て、この学校の学問は自分の肌に合わないと感じる。

黄河は実際に存在するのに、その存在証明を課題とするような学問には、現場の労働で鍛えられた白鬚ゼンの実践感覚からするとついていけないのである。かれにとって、学問は考えることであり、「考えることはとても楽しいことです。そして楽しいことは学ばなければなりません。むしろ、楽しいことは役に立つ、と言うべきでしょう」というものである。かれは、土地を分配するカイ・ホーの学問に興味を示し、学校の外の路上で知識を売ろうとまとわりつく学者に向かって、「恥ずかしくないのか。あんたは考えてはいるが、それで何をしているのだ。そもそも考えるということは、人間が行うことのできるもっとも貴いものなのだ。なのに、あんたはそれで汚らしい商売をしている」、とはっきり言い切る。考えること（動物とは違う点）をもっと大事にしろ、というわけである。

学会議に招かれた白鬚ゼンは、体制派学者の下手な弁舌を聞いて、お喋りはりっぱだが、「かれらの学問の畑は狭すぎる。」と感想を述べる。学者、思想に奥の深さと幅広さが感じ取れなかったたのである。

ブレヒトが描く白鬚ゼンは、学者（トゥイ）の学校、学会議、路上の学者たちの世界を見て、学者一般を否定するようになったのではなく、偽者と本物を明確に区別するようになり、人間の幸せに結びつく学問本来の姿を社会との結びつきではっきりとイメージするようになる。かれは橋を指さして、自分の子どもに尋ねる：「あの橋はだれがつくったものだ」と。子どもは「皇帝がつくった」と答える。ゼンは子どもに「もっと良く考えるように」という。子どもは「左官屋」と答える。そこでかれは次のように教える：「そうだ。しかし、つくり方を教えたのは学者だ」と。

芝居が進むにつれ、ゼンは学問に対する認識を深める：人は橋をつくるが、「そのおかげで、権力者は橋を車で通って腐敗へと進む。貧しいものたちは歩いて渡って奴隷になる。医学が進歩したのも事実だ。しかし、病気を治してもらうのは、一方の人々は不正を行うため、他方の人々はかれらのためにあくせく働くためだ」。ゼンは、ここで、学問の成果が必ずしも人間の幸せな生活に結びつかないという社会的矛盾を指摘する。それだからこそなおかつ、かれは、学問を土地に例えて、学問の必要性を訴える：「学者は土地のようなものだ。その土地から何を徳たいのか、黍なのか雑草なのかを、決めなければならない。そのためには土地が必要なのだ（人々は、学者から何かを得るために、学者を必要とする）」。

ブレヒトは、学問の成果が人々の幸せな生活に役立つことを願っているわけだが、誤解のないように述べるが、明日食べていくことにすぐに役立つ学問だけを考えているわけではない。ブレヒトの許容範囲は広い。それは学会会議で首を切られた名もない学者を見て、感想をもらす学校の書記の台詞で分かる：「この方は私の先生で、中国語文法の巨星です。学会会議で馬鹿なことをしゃべったもんだ。今じゃ、白居易の詩を解釈できる人はいなくなった。どうしてこの連中は自分の専門分野の畑でじっとしておれなかったのだろう」。

白鬚ゼンは、舞台の出来事を解説する役割を担いつつ、考えることが楽しくて有益な学問を捜し求めた。ひょっとしたら、ブレヒトは、ワイマール共和国時代のインテリを批判し、風刺するだけでなく、かれが生きていた今はない東独のインテリを批判し、東独市民には白鬚ゼンのようにあって欲しいと願ったのではなかろうか。

学者と庶民の接点（学者と市民の連携）

この作品では、学者と庶民の接点として、学者の市場、路上が描かれている。学者たちは自分の知識を売り、買い手の庶民はそれぞれの個人的な事柄で知識を買う。そこでは、売った者と買った者の個人的満足で終わってしまう。現在では、別の形の学者と市民の連携が求められている。その場は、売り買いの世界ではなく、白居易の詩を読むことでも良い、市民のニーズに応じて、学者と市民が一緒になって研究したり調査したりして、互いに刺激し合い少しずつお互いに賢くなっていく、そんな場である。展望なき時代にあっては、10年後20年後がどうなるか分からないが、市民は学者から何かを得、学者は市民から何かを得る、その過程の中で次の時代の芽をつくるのが大事なのではないだろうか。そういう芽を多くつくるためには、市民側には、黒を白という学者は別として、食べることに直接役立たないさまざまな学者を、その許容範囲内に納めることが求められる。

上演の可能性

昨年、俳優座がブレヒトの『肝っ玉おっ母とその子供たち』を津市で上演した。好評を博したのは、政治的に意識の高いごくひとにぎりの観客だけであった。商品を積んだ幌車を引いて、兵士相手に商売をする母の物語である。母は戦争で3人の子供を犠牲にする。しかしそれでもなおかつ商売を続けるために、移動する兵士の後を追って行く。母は戦争から何も学ばなかった。このことをブレヒトは観客に学んで欲しかったのであろう。だが、今の観客は「笑いと言気と斬新さ」を求めており、ブレヒトの作品は昔と違って観客の期待に応えがたくなってきている。

『トゥーランドット姫』を日本で上演しても、成功率はきわめて低いと言わざるを得ない。展望もなく、昔のように労働運動もない今の時代に、カイ・ホーをひとつの展望として出したところで、誰もそれに対して距離を置き、しらけてしまう。文化財を隠す場面があるが、カイ・ホー政権下の中国でも、俳優や音楽家は台本や楽譜を隠した。そんな時期があったことは、

ブレヒト死後の出来事なので、ブレヒトは知らない。しかし、もしかれが生き長らえてこの出来事を聞き及んだとしたら、『トゥーランドット姫』を書き換えたであろう。

翻訳ものの芝居は、往々にして俳優の台詞のしゃべり方が早くなり、何を語っているのか分からなくなり、観客の不評を買う場合が多い。そこへ持ってきて、次の台詞、「その（橋の）おかげで、権力者は橋を車で通って腐敗へと進む。貧しいものたちは歩いて渡って奴隷になる。医学が進歩したのも事実だ。しかし、病気を治してもらうのは、一方の人々は不正を行うため、他方の人々はかれらのためにあくせく働くためだ」を、観客が聞くと、一瞬頭が飛んでしまい（何のことかわからなくなり）、芝居への興味を失ってしまう。読む戯曲として、何回も読みじっくり考えると、科学技術は中立でそれを利用する側の人間に問題がある、ということなのだが、時間が勝負でじっくり考える暇のない芝居では、ましてや、階級的物の見方が一般的でなくなった今日において、なんでわざわざそんな言い方をするのかと、不信に思われるであろう。

もしこの作品を上演するとしたら、カイ・ホーを全面削除し、かつ翻案に近いぐらいに改作する必要があるのではないだろうか。

参考文献

Bertolt Brecht, "Turandot oder Der Kongreß der Weißwäscher", in Bertolt Brecht Große Kommentierte Berliner und Frankfurter Ausgabe Bd. 9 Stücke 9 (Frankfurter am Main: Suhrkamp Verlag. 1992)

Jan Knopf, "BRECHT HANDBUCH Theater" (J. B. Metzlersche Verlagsbuchhandlung Stuttgart. 1986)

ブレヒト著、岩淵達治訳『トゥーランドット姫 一名 三百代言の学会議』、ブレヒト戯曲全集第7巻（未来社. 1999） *本文中の訳はこれを参照した。

八木浩著、『トゥーランドット姫 または潔白証明者会議』、ドイツ文学研究叢書5「ブレヒト 叙事詩的演劇の発展」（クヴェレ会 1980）